

○『大無量寿経(下巻)』 三毒五悪段

然るに世人、^{はくぞく}薄俗にして共に^{ふきゆう}不急の事を^{あらそ}諍う。劇^{ぎやくあくごつ}悪極苦の中において身の^{ようむ}営務を勤めて、もって自ら

^{きゆうさい}給済す。尊もなく卑もなし。貧もなく富もなし。少長男女共に^{ぜんざい}錢財を憂う。有^{どうぜん}無同然なり。憂^う患^う隨^ずに等し。

^{びやうしゅうく}屏營愁苦して、^{おん}念いを^{かまね}累ね^{おも}慮^{ぼか}りを^つ積み、^{しん}心のために^は走せ^せ使いて、^{やす}安き時あることなし。田あれば^{でん}田を憂う。宅あれば^{たく}宅を憂う。牛馬六畜、^{めい}奴婢、^{ぜんざい}錢財、^{えじき}衣食、^{じゅうぶつ}汗物、また共にこれを憂う

意識

ところが世間の人々はまことに浅はかであって、みな急がなくてもよいことを争いあっており、この激しい悪と苦の中であくせくと働き、それによってやっと生計を立てているに過ぎない。身分の高いものも低いものも、貧しいものも富めるものも、老若男女を問わず、みな金銭のことで悩んでいる。それがあろうがなかろうが、憂え悩むことには変わりがなく、あれこれと嘆き苦しみ、後先のことをいろいろと心配し、いつも欲のために追い回されて、少しも安らかなときがないのである。

田があれば田に悩み、家があれば家に悩む。牛や馬などの家畜類や使用人、また金銭や衣食、日常の品々に至るまで、あればあるで憂え悩む。それらのものについてとにかく心配し、何度もため息をついて嘆き恐れるのである。

○曇鸞『浄土論註』

仏^{もと}本此の^{しやうごんじゆんじゆん}莊嚴清淨功德成就を^{ゆえん}起こしたう^{さんがい}所以は、三界は^{まぼろし}是れ虚偽の相、^{りんぜん}是れ輪轉の相、^{むくろ}是れ無窮の相にして、^{しやうかく}蜘蛛の^{しやうかん}修環するが如く、^{きんけん}蚕繭の自ら縛る如く、^{あはれ}哀れなるかな、衆生、此の^{さんどう}三界顛倒の^{きず}不浄に^{まじ}締るを見そなわして衆生を^{まぼろし}不虚偽の処に、^{りんぜん}不輪轉の処に^{むくろ}不無窮の処に置いて、^{しやうじゆんじゆん}畢竟安樂の大清淨処を得しめんと欲めす

意識

仏がもと、この莊嚴清淨功德を起こされた所以は、三界を見られるに、虚偽にみち、流転し、輪廻は窮ることがない。その相はあたかも、尺取虫が廻り歩くようであり、また、蚕が繭を作って自らを縛っているようである。ああ何と哀れなことであろうか、衆生はこの三界の顛倒の不浄に束縛されている。その相を見られ、衆生を虚偽なき処、無窮でない処に安住させ、絶対安樂の大清淨の処を得させようと願われたのである